

第 3 学 年 道 徳 学 習 指 導 案

日 時 平成 18 年 10 月 12 日 (木) 5 校時
学 級 3 年 C 組 (男 15 名 女 14 名 計 29 名)
指 導 者 教 諭 山 本 淳

1 主 題 名 「命をいとおしむ」 内容項目 3 - (2) (生命の尊重)

2 資 料 名 「たとえばくに明日はなくとも」 (出典 「東京書籍 明日をひらく 3」 岩手県版)

3 主 題 設 定 の 理 由

(1) ねらいとする価値について

学習指導要領では内容項目 3 - (2) について、「自他の生命の尊さを学ぶためには自己の生命への尊厳、尊さを深く考えさせ、他の生命を尊重する態度を身につけさせることが大切である」としている。

近年、ニュースでは殺人や自殺といった自他の生命を軽視した事件の報道が頻繁にされている。物質的には便利になりとても生活しやすい環境になってきてはいるが、それとは反対に精神的に幼く、自分の価値観と違うものを排除したり、気分や感情だけで生命を軽視する軽はずみな行動をしてしまう傾向がある。

中学生のこの時期には心身共に急激に発達するが、同時に人間の生き方や考え方への関心も高まる。このように心身の変化の著しいこの時期にかけがえのない生命について深く考えることは充実した人生を創造していく上で大変意義深いことである。

そこで、生命は唯一無二でかけがえのないもの、代替えのできない存在であるという生命の尊厳に気づかせるとともに、やり直しのきかない一度だけの人生であり、今という時間は二度と再び取り返すことのできない時間であることを認識させる必要があると考えた。そして、このことへの理解を深めることが自分の人生を大切にしていくことになり、他の人々の生命の尊さについても考えていくきっかけになると考える。すなわち、生命の尊さをもとに人間は有限な存在であり、「死」は絶対的なものであることを自覚させ、一日一日を精一杯生きることの大切さに気付かせることで、人間としてどのように生きていくかを考え、深めていくとともに自他の生命を尊重する態度を身につけさせていきたいと考え、本主題を設定した。

(2) ねらいに関わる生徒の実態について

本学級の生徒達は男女の仲も良く、明るく元気があり、素直な生徒が多い。道徳の時間では、積極的に挙手をして発言する生徒は多くはないが、他の人の考えを真剣に聞き、自分の考えと照らし合わせながら自分の考えを深めようとする姿勢が見られる。

学校行事にも積極的に取り組み、自他を尊重しようという態度が培われてきた。その一方で日常の会話の中では「殺す」、「死ぬ」といった言葉や、自分が失敗すると「死にたい」という言葉を平気で使う場面が見られる。「死」という言葉が頻繁にテレビから流れてくる時代にあって、生命の大切さを言葉の説明だけではなく、生きることの意味や尊さを考えさせることにより、生命のかけがえのなさを理解させ、自己の生命を大切に生きようとする意欲を高めていきたい。

(3) 資料について

生徒の実態からねらいを達成するために本時で扱う資料を「たとえばくに明日はなくとも」とした。この資料は筋ジストロフィーと闘いながら、短い人生を燃焼した青年の話である。二十歳までの命だと告げられた青年がそのことをしっかりと受け止め、残された時間を大切に、自分が人間としてどのように生きていくか、幸せな人生とはどんなものかを考えながら生きようとする姿が描かれている。

本時ではこの資料を改作し、提示する。改作する理由を 原作が長文のため 1 時間で扱うのは難しい。

本時の価値に近づけるために両親の辛い思いをあえて最小限にする 館野さんの素晴らしさを強調し、主人公の気持ちに共感させる、とした。この資料を用い、自己の生命のかけがえのなささと人間の存在の有限性に気付かせ、目標に向かって自らの人生を積極的に生きようとする心情を育てていきたい。

4 指 導 に あ た っ て

導入では作者の詩の一つを読むことで生徒が生命について考えるきっかけとしたい。展開前段では年齢や経験によって徐々に変わっていく主人公の生命に対する考え方に共感させ、生命のかけがえのなさに気づかせたい。展開後段では自分たちに振り返らせることにより、生命の尊さや有限性に気付かせ、その限られた時間の中で生きることの意味や素晴らしさを感じさせたい。終末では教師の説話により余韻を持たせたい。

5 本時の指導

(1) ねらい

自分の短い生命を燃焼させ、精一杯生きた石川さんの生き方を通して、生命のかけがえのなさや尊さを理解し、生命を大切にしながら自分の人生を積極的に生きようとする心情を育てる。

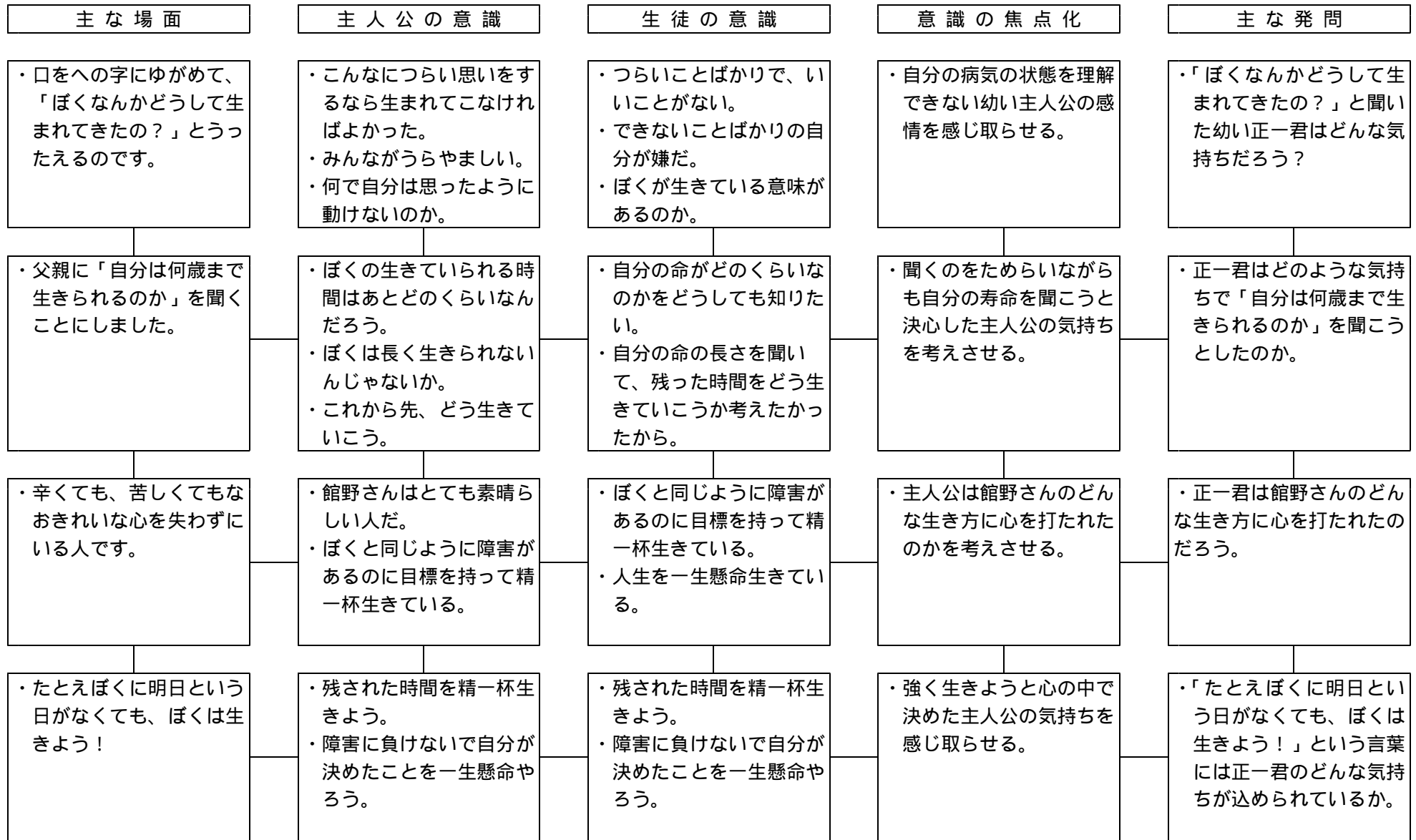
(2) 展開

段階	学習活動と主な発問	予想される生徒の意識	指導上の留意点
導入 7分	<p>1 自分が生きている意味について考える。</p> <p>2 石川正一さんの詩を読む。 (たとえ短い命でも...)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 考えたことがない。 分からない。 何も考えられない。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分が生きている意味を考えさせることで生命について考えるきっかけとしたい。 障害のある主人公の考えた詩を読むことにより問題提起をし、本時の導入とする。
展開 40分	<p>3 資料「たとえばくに明日はなくとも」の範読を聞き、状況の把握を行う。</p> <p>「ぼくなんかどうして生まれてきたの？」と聞いた幼い正一君はどんな気持ちだろう。</p> <p>正一君はどのような気持ちで「自分は何歳まで生きられるか」を聞こうとしたのか。</p> <p>正一君は館野さんのどんな生き方に心を打たれたのだろう。</p> <p>「たとえばくに明日という日はなくても、ぼくは生きよう！」という言葉には正一君のどんな気持ちが込められているか。</p> <p>4 石川正一さんの詩を読む。 (たとえばくに明日が...)</p> <p>5 生き方について考える。 (学習プリントに書く。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> つらいことばかりでいいことがない。 できないことばかりでいやだ。 ぼくが生きている意味があるのか。 自分の命がどのくらいなのかをどうしても知りたい。 自分に死が近づいてきているのを感じていたから。 自分の命の長さを聞いて、残った時間をどう生きていこうか考えたかったから。 自分と同じように障害があるのに目標を持って精一杯生きている。 人生を不幸だと思わず一生懸命生きている。 残された時間を精一杯生きよう。 障害に負けないで自分が決めたことを精一杯やろう。 たとえ明日、死ぬことになっても悔いを残さない生き方をしよう。 毎日を精一杯大切に生きたい。 悔いのない人生にしていきたい。 自分が決めたことを最後まで貫いていきたい。 何か集中して打ち込めることを見つきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 状況をしっかり把握させ、資料に集中させる。 自分の病気の状態を理解できない、幼い主人公の感情を感じ取らせる。 聞くのをためらいながらも自分の寿命を聞こうと決心した主人公の気持ちを考えさせる。 主人公は館野さんのどんな生き方に心を打たれたのかを考えさせる。 強く生きようと心の中で決めた主人公の気持ちを感じ取らせる。 生きる価値を見いだした正一さんの詩を読むことで本時の価値につなげていきたい。 自分の生き方を自分でしっかりと考えることの大切さを理解させる。 生命を大切にす多様な考えを聞くことにより、今を大切に生きていこうとする心情につなげたい。
終末 3分	6 教師の説話		<ul style="list-style-type: none"> 題名にまつわる説話をすることで余韻を残す。

6 評価

生命のかけがえのなさや尊さを理解し、生命を大切にしながら積極的に生きようとする気持ちを持つことができたか。

7 資料分析図（たとえばくに明日はなくとも）



たとえぼくに明日はなくとも

詩

- 自分が生きている意味を考えてみよう。
- 考えたことがない。
- 分らない。
- 何も考えられない。

- ぼくなんかどうして生まれてきたの？
- つらいことばかりでいいことがない。
- できないことばかりでいやだ。
- ぼくが生きている意味があるのか？
- 生まれてこなければよかった。
- ぼくはいつまで生きられるの？

- 自分の命があとどれくらいかどうしても知りたい。
- 自分に死が近づいてきているのを感じていたから。
- 自分の命の長さを聞いて、残った時間をどう生きていこうか考えたかったから。
- 死ぬのが怖かったから。

館野さんは素晴らしい！

- 自分と同じように障害があるのに目標を持って精一杯生きている。
- 人生を不幸だと思わず一生懸命生きている。
- 自分の人生に目標を持ち、輝いて生きているところ。
- たとえぼくに明日という日がなくてもぼくは生きよう！
- 残された時間を精一杯生きよう。
- 障害に負けないで自分が決めたことを精一杯やろう。
- たとえ明日、死ぬことになっても悔いを残さない生き方をしよう。

詩

- 大切なことはどんなことだろう。
- 毎日を精一杯大切に生きたい。
- 悔いのない人生にしていきたい。
- 自分が決めたことを最後まで貫いていきたい。
- 何か集中して打ち込めることを見つけない。

たとえぼくに明日はなくとも

たとえ短い道のりを進もうとも

生命は一つしかないのだ

だから何かをしないでいられない

いっしょうけんめい

心をいそがしく働かせて

心のあかしをすること

それは窯の激しく

燃えさかる火にも似ている

窯の火は陶器を焼き上げるために

精いっぱい燃えている

大切なことはどんなことだろう。

石川正一さんの詩

たとえ短い命でも生きる意味があるとすれば
それは何だろう

働けぬ体で一生涯を過ごす人生にも

生きる価値があるとすればそれは何だろう

もしも人間の生きる価値が

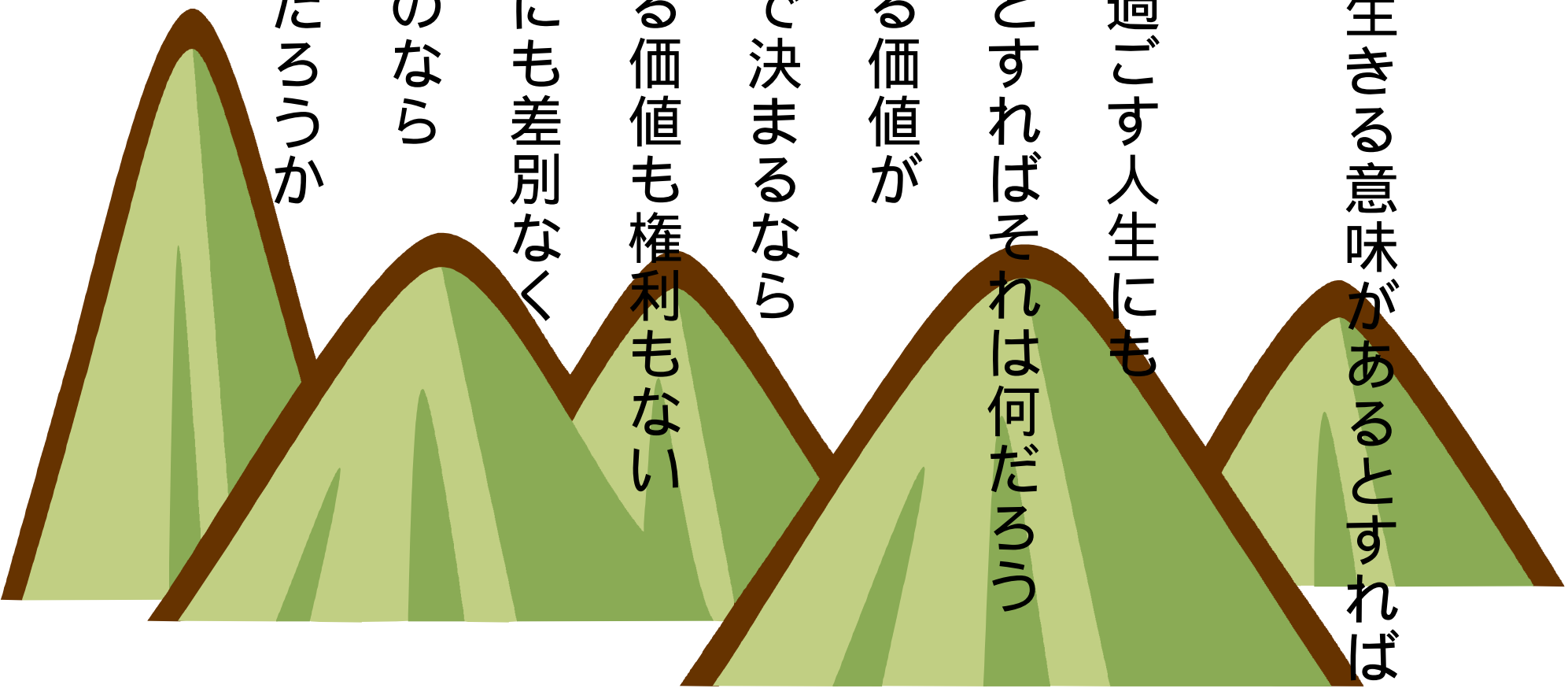
社会に役立つことで決まるなら

ぼくたちには生きる価値も権利もない

しかしどんな人間にも差別なく

生きる資格があるのなら

それは何によるのだろうか



たとえぼくに明日がなくとも

たとえ短い道のりを歩もうとも

生命は一つしかないのだ

だからなにかをしなないでいられない

いっしょうけんめい心をいそがしく働かせて

心のあかしをする二つと

それは窯の激しく燃えさかる火にも似てい
る

窯の火は陶器を焼き上げるために精いっぱい
燃えている